

●静寂楽しむ人に格別

吉田温泉はえびの市昌明寺というところにあつて、別名・昌明寺温泉とも言った。矢岳高原（標高約七〇〇m）の南麓（ふもと）で、昔から豊富なゆづり湯を誇る。昨今、温泉のありようが話題になったが、この湯は絶え間なくわき出て、惜しげもなく流れていく。

京町温泉駅から約二・八km。えびの盆地の西北に位置し、車だと数分で着く。展望は開けていないが、ひなびた雰囲気と静寂を楽しむ人には、格別のお湯である。

元龜三（一五七二）年五月四日、南九州の覇権を狙う伊東氏は、早朝から薩摩・島津氏の加久藤城を攻めたが、攻めあぐねて木崎原で休止した。飯野城にいた島津義弘は、手勢を率いて加久藤城の救援に向かう途中、休止している伊東勢に突っ込み、壮絶な決戦となった。油断のあった伊東勢は、主な武将を討たれて敗北した。



吉田温泉。ひなびた味わいが湯治客を引き付ける

この地は、昔から良米を産出する穀倉地として知られ、戦国時代には争奪の場となった。大河平（おこびら）城跡、今城跡、飯野城跡、加久藤城跡など同時代の山城の跡も多い。

ところで温泉のよきは、雰囲気と効能である。一九一一年（明治四十四）年に建てられた吉田温泉の「記念碑」に次のような碑文がある。

「当温泉ハ口碑ニ曰ク『往昔箭疵（やきず）ヲ負ヒシ牡鹿来タリテ其ノ瘡ヲ癒セシコトアリト』依ッテ鹿ノ湯トモ称ス 今ヲ距ル三百四十五年前：永禄九（一五六六）：島津家十七代ノ太守義弘公真幸院ニ鎮タリシ時伊東氏菱刈氏ト屢々交戦シ公及ビ兵士多ク刀刃ヲ蒙リ 此温泉ニ浴スルニ神効アリシカバ公特ニ感賞シ常ニ愛浴シ玉フ：古来遠近ヲ問ハズ集マリ来ッテ浴スル者甚ダ多ク何レモ其ノ神効ヲ感嘆セザルハナシ：」一八七七（明治十）年六月から七月にかけて、

この付近は西南戦争の戦場になった。また同年八月末には敗走する薩軍が通過した。西南戦争の負傷者も、この湯の神効に頼った者が多かったことであろう。

昭和時代初めまでは、農繁期を終えた人々が、米やみそを持参して、自炊しながら滞在し、湯治を楽しむ温泉であった。今も固定客、またうわさを聞きつけ、県内外から訪れる人が絶えない。温泉場の近くにお湯権現様が鎮座している、ひと昔前まではけが、病気の治った人がお礼参りにきて松葉づえを置いた。弾痕の残った大クスも立っていたという。

鶴ヶ野 勉